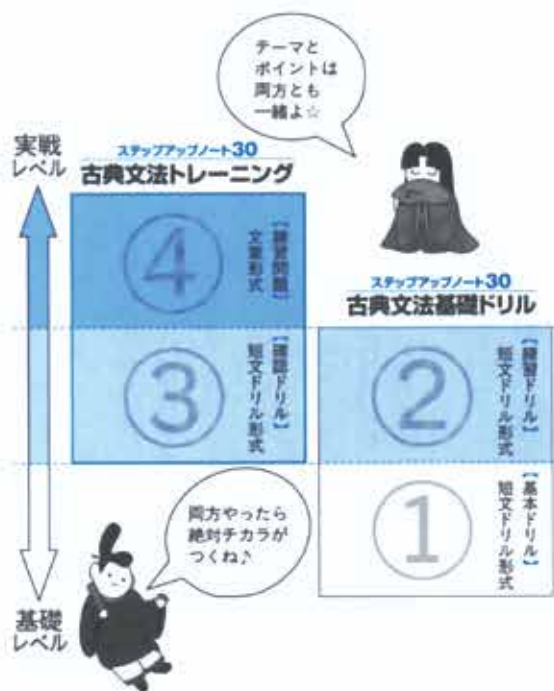


◆はじめに

こんにちは。「河合塾 文・トレライターズ」です。^(^^)
 「ステップアップノート30 古典文法基礎ドリル」が刊行されてしばらくすると、私たちのところには、日々、いろいろなご意見が寄せられてくるようになりました。その中で、「一番多くいただいたご意見が、「基礎ドリル」が終わったら、次は何をやればいいのか」というものでした。「文法はできるようになったけど、なかなか点数がとれないよ」というご意見もあります。文法力がついても、文章に慣れていないために、文法から内容把握へ、知識がつかっていかないのです。

そこで私たちは、みなさんに「文法が理解できる→文章の内容がわかる→設問に正しく答えられる→点数が取れる」と、文字通り**ステップアップ**していただけるように、「ステップアップノート30 古典文法トレーニング」(「文トレ」って呼んでね)を作りました。まずは次の図表を見て下さい。



上の図表からもわかるとおり、「文トレ」の**確認ドリル**(図表③)は、

「**基礎ドリル**」の**練習ドリル**(図表②)とだいたい同じレベルです。けっして難解ではありませんが、「初歩的」というわけでもありません。古典文法を少し学習した人ならなんとか解けるレベルであり、そのまま入試に出題されてもおかしくない程度の、短い例文を使った文法ドリルです。

「文トレ」の**練習問題**は、実際に文章の中に現れた文法を使って解く問題です。文法がわかれば簡単に答えられる「**解釈問題**」や「**説明問題**」とか、逆に、カタチだけでなく内容も考えなくては答えが出せない「**文法問題**」とか、文法力に加えて、もうひとひねりパワーを必要とする、まさに入試レベルの古文読解への橋渡しといえるものです。

各講の「**テーマ**」と「**文法ポイント**」は、「**基礎ドリル**」とほぼ同じにしました。ここを連動させることによって、さまざまな使い方が可能になります。たとえば、「**文トレ**」を③→④→③→④の順に一冊仕上げる、という通常の方法的ほかに、

Ⅰ 二冊の各講ごとに①→②→③→④と丁寧に練習していくことによつて、文法力と読解力を着実に身につけていく方法。

Ⅱ 二冊の各講ごとに、まずは①→②→④→①→②→④とひととおり解いて、しばらく時間を置いてから、復習として③だけをまとめてやる方法などです。

これらを繰り返し練習することで、自然と読解力が身についてきます。この一冊を解き終えたみなさんは、自信を持って、次の実戦的な問題集(「**マール式基礎問題集**」・「**中堅私大古文演習**」・「**得点奪取古文**」(いずれも小社刊)など)や、実際の入試問題にステップアップしていけるはずです。

この「**文トレ**」が、みなさんの志望校合格にむけての手助けとなり、実力アップの脇役になれることを、心から願っています。

平成二十一年二月二十一日

◆ 改訂版発行のごあいさつ

はろー。またまた「文・ト・レ・ライターズ」です。⁽¹⁾
 『ステップアップノート30 古典文法基礎ドリル』の刊行から四半世紀を過ぎ、本書の初版発行からもずいぶん長い年月が経ちました。今では「お父さんも使っていたそうです」なんて言われることもあって、うれしいやらちょっと恥ずかしいやら、複雑な気持ちです。⁽²⁾

時代の移り変わりとともに、センター試験が共通テストになり、学校教育にタブレットが導入され、勉強のしかたも変化して来いています。ただ、古文の入試はというと、単語力と文法力、それに基づく読解力が必要であるという点では、何も変わりはありません。日々の努力の積み重ねが実を結ぶことは、まちがいないのです。

今回の改訂では、ますます重症化する受験生の「古文ニガテ病」に対処すべく、『確認ドリル』の設問を見直し、『練習問題』の本文を差し替え、前書きや注、傍訳を付け直して、できるだけ使いやすくしたつもりです。『基礎ドリル』ともども、本書が少しでも古文学習に役だってくれることを願っています。そして、「めざせ、三世代！」みなさんに、自分の子どもたちにも薦めていただけるよう、私たちも精進します。⁽³⁾

令和六年十一月十一日

文・ト・レ・ライターズ一同

◆ 本書の使い方

本書は、『ポイント』『確認ドリル』『練習問題』から成っています。

1 まず、『ポイント』をじっくり読んで下さい。

ここには、古典文法を勉強するうえで、どうしても知っておかなければならないことが書かれています。「とにかくこれだけは理解してほしい」と私たちが切実に考えていることしか書いてありません。

また、授業中や、答案の添削をしている中で気づいた、受験生がつまづきがちな部分に🐞(チュウちゃんマーク)をつけて注意しておきました。ちょっと気にとめて見て下さい。

2 次に『ポイント』の下にある『確認ドリル』を解いて下さい。

これは、『ポイント』の内容を理解するとともに、いま見た『ポイント』からどのような文法問題が作られるのかを体験するためのものです。たとえ正解できなくても、解答冊子にある解説と例文の訳を読んで、十分に納得してください。それが次の文章題を解く足がかりとなります。

そして、次のページにある『練習問題』に進みます。

ここでは、文章の中で使われる文法を理解し、それが設問にどのような関連してくるのかを考えて、正しい答えを導き出す練習をします。そのためにはまず文章を丁寧に読む習慣をつけましょう。解いていく手順は次のとおりです。

- (1) 設問を読み、問われている内容をしっかり理解する。
- (2) 本文の傍線部、もしくは傍線部を含む前後の部分までを品詞分解・逐語訳し、文法的にも内容的にも、傍線部を理解する。
- (3) 客観型の設問では、選択肢を吟味し、傍線部と照合する。

最後は答え合わせです。

解答冊子を見ながら、答え合わせをして下さい。解答冊子は、問題を再録し、本文の横に訳を施すことによって、それだけでも復習できるようなっています。まちがったところは、下段の解説を読み、自分が何を勘違いしたのかを、把握しておきましょう。そして必ず、本編の『ポイント』に立ち返って、定着していなかった知識を確認しましょう。

一度目のチャレンジでどのぐらいできたのかを、各講のタイトルの下にある「○お月様マーク」にチェックしておきましょう。

簡単にできた

なんとかできた

ほとんどギブアップ

自分でつけたチェックにしたがって、二度目のやり方を考えましょう。

● なら、『ポイント』と『練習問題』をざっと見直すだけでOK。

● なら、『練習問題』の訳をじっくり読んでから再度解き直す。

● なら、まずは『確認ドリル』を完璧にする。

❖ もくじ

1	古典文法 事始め	6
2	動詞 (一)	8
3	動詞 (二)	10
4	形容詞	12
5	形容動詞	14
6	助動詞入門	16
7	助動詞 (一) 「き」「けり」	18
8	助動詞 (二) 「つ」「ぬ」	20
9	助動詞 (三) 「ず」	22
10	助動詞 (四) 「たり」「り」	24
11	助動詞 (五) 「る」「ちる」	26
12	助動詞 (六) 「す」「さす」「しむ」	28
13	助動詞 (七) 「む」「むず」「じ」	30
14	助動詞 (八) 「らむ」「けむ」	32
15	助動詞 (九) 「べし」「まじ」	34

16	助動詞 (十) 「なり」「なり」	36
17	助動詞 (十一) 「めり」「ちし」・音便 <small>（おんべん）</small>	38
18	助動詞 (十二) 「まし」「まほし」	40
19	助詞 (一) 格助詞	42
20	助詞 (二) 接続助詞	44
21	助詞 (三) 副助詞	46
22	助詞 (四) 係助詞	48
23	助詞 (五) 終助詞	50
24	敬語	52
25	敬語法	54
26	「ぬ（ね）」の識別	56
27	「る・れ」の識別	58
28	「なり」の識別	60
29	「なむ」の識別	62
30	「に」の識別	64

■五十音図・十二支・品詞分類表・重要敬語一覧・
 助詞一覧表・助動詞一覧表・旧国名都道府県名対照図・
 平安貴族の衣裳・月の異名・時刻・方位・月齢

15 助動詞(九)「べし」「まじ」「まじ」

- 「べし」の六つの意味を覚える。
 □ 「まじ」「まじ」の反対の意味を持つ。

ポイントA

「べし」「まじ」の接続と活用

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
終止形 (ラ変型は 連体形)	べし	(べく)	べく	べし	べき	べけれ	○	形容詞型
終止形 (ラ変型は 連体形)	まじ	(まじく)	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○	形容詞型
終止形 (ラ変型は 連体形)	まじ	まじから	まじかり	○	まじかる	○	まじかれ	形容詞型

ポイントB

「べし」の意味

- ① 当然 (～はずだ・～べきだ・～にちがいない・～ねばならない)
- ② 推量 (～だろう・～しそうだ)
- ③ 意志 (～よう・～たい)
- ④ 可能 (～できる)
- ⑤ 適当 (～ほうがよい)
- ⑥ 命令 (～せよ)

「まじ」の意味

- ① 打消当然 (～はずがない・～べきでない・～ないにちがいない)
- ② 打消推量 (～ないだろう・～そもない)
- ③ 打消意志 (～まい・～ないつもりだ)
- ④ 不可能 (～できない)
- ⑤ 不適当 (～ないほうがよい)
- ⑥ 禁止 (～するな・～てはならない)

「べし」は最も多くの意味を持つ助動詞で、明確には区別しにくいですが、六つの意味と訳しかたを覚えておいて、文脈にふさわしいものを選んでゆく。

確認ドリル

解答・解説は別冊9ページ

1 次の□の語を適当に活用させて答えよ。

① 女も、ものあはれに「おぼゆ」べし。

□ ①

② 女子こそ、よく言はば、持ち「侍り」まじきものなりけれ。

③ むなしう帰り参りたらんは、なかなか帰参らざらんより

「悪し」べし。

□ ②

2 次の□に「べし」を活用させて答えよ。

① ただこの住み処こそ見棄てがたけれ。いかがす□。

② あやしう夢のやうなる目をも、見る□けるかな。

□ ①

□ ②

3 次の□部の文法的意味を答えよ。

① 東国北国の凶徒ら追討すべきよし仰せ下さる。

② 我が身は女なりとも、敵の手にはかかるまじ。

□ ①

□ ②



15 助動詞(九)「べし」「まじ」

練習問題の解答

さるほどに兵衛佐頼朝、伊豆の国蛭が小島へ流さるべしと定めらる。池殿、頼朝を近く呼び寄せて、姿をつくづくと見たまひて、「げに家盛が姿に少しも違はず。あはれ、都のへんに置きて、家盛が形見に常に呼び寄せて見たくこそ候へ。はるばると伊豆の国まで下さむことこそうたてけれ。わ殿をば家盛と思ひ、春秋の衣裳は一年に二度下すべし。尼をば母と思ひ、空しくなりたらば、後世をもとふらふべし。流され人の思ふさまにふるまふとて、国人に訴へられ、二度憂き目見るべからず」とのたまへば、兵衛佐殿かしまつて、「いかでさやうのふるまひつかまつり候ふべき。髪をも切り、父の後生をもとふらばやとこそ存じて候へ」と申されければ、「よく申すものかな」とて、池殿涙を流したまひ、「とくとく」とのたまへば、御所を出でられる。

『平治物語』

(訳) そうするうちに兵衛佐頼朝は、伊豆の国の蛭が小島に流されるべきだと決定される。池殿は、頼朝を近くに呼び寄せて、姿をつくづくと一瞥になって、「本当に(亡き)家盛の姿に少しも違わない。ああ、都のそばに(あなたを)置いて、家盛の形見としていつも呼び寄せて見たくございます。はるばると伊豆の国まで下らせるようなことがつらい。あなたを家盛と思ひ、春と秋の衣裳は一年に二度(伊豆に)送るつもりだ。この尼(=私)を母と思ひ、(私が)死んだならば、(私の来世のための)供養をなさい。「流人が思うままにふるまう」といって、土地の人々に訴えられて、ふたたびつらい目に遭ってはいけない」とおっしゃるので、兵衛佐殿はかしまつて、「どうしてそのようなふるまひをいたしましたしょうか、いや、いたしません。(私は)髪も切つて(出家し)、父の(来世のための)供養もしたいと思っております」と申し上げなされたので、「よく申すものよ」と言つて、池殿は涙を流しなさり、「早く早く(行きなさい)」とおっしゃるので、(頼朝は)御所をお出になつた。

練習問題の解説

問一「べし」の意味は文脈を踏まえて決める。

1 まず前書きから源頼朝が平家に捕らえられている状況にあることを確認すると、「流さる」は、「る」を受身と考えて「頼朝が」流される、「または」、「る」を尊敬と考えて「(頼朝を)流しなさる」と読み取れる。後の「定めらる」につながるように「べし」の意味を考える。

イの命令は、「流しなさる」ことを命じて「流しなされ」と訳すことになり、文脈的には成立する。

ロの意志は、「流しなさる」ことを望んで「流しなさろう」と訳すことになり、文脈的には成立する。

ハの当然は、「流される」ことを当然のこととして「流されるべきだ・流されねばならない」と訳すことになり、文脈的には成立する。

ニの適当は、「流される」ことが適当だとして「流されるほうがよい」と訳すことになり、文脈的には成立する。

よって、1では決定できないことが分かる。以上のように「べし」の意味は一つには決めたことがあるのを忘れないでほしい。結局、2・3で決めるしかないのである。

2 ここは池殿の会話部で、「(私は)あなたを家盛と思ひ、春と秋の衣裳は一年に二度送るつもりだ」と池殿自身の思いを語っている箇所なので、意志を考えるのがよい。よってイかハ。このように会話部や思考部の中で主語が一人称の場合は意志であることが多い。

3 ここも池殿の会話部であるが、「(あなたは)二度とつらい目に遭ってはいけない・遣うべきではない」と言っている。よって命令か当然である。選択肢には当然がないのでハかニ。

以上から正解はハとなる。